

# 労協連だより

幕あがり、舞台本番始まる！5.20協同労働法早期制定市民集会は、そんな雰囲気と、それを醸し出す豪華キャストの登場で、法制化運動の本番の開始を告げた。

集会は、井口市民会議副会長（元JAおんが組合長）のあいさつに続き、連合・笹森会長の熱のこもった連帯・支援の挨拶で、うなりと共に会場が高揚した雰囲気に包まれる。続いて挨拶に立たれた衆議院議員・自民党の長勢甚遠先生からは、法制定に向けた課題を提起された。最後に、「私を説得できれば、この法律は出来る」と断言され、会場は再び大きなよめきと拍手に包まれた。挨拶はいただけなかったが、JA全中の今尾常務も壇上にご列席頂き、協同組合運動の力強い支援への流れを感じることができた。集会オープニングに登場された来賓の方々は、皆さん労協関連の集会には「初登場」だった。しかも、名だたる方々の登場で、物語本番を感じた次第である。

苦慮の末、2部構成の集会になったが、第2部では、共産党・小沢和秋先生、社民党・金子哲夫先生のあいさつ、自由党・東祥三先生の代理・秘書の方の出席の中、法制化を求めて全国から集まった精鋭8人による訴えが行われた。それぞれ短い時間の発言となったが、この集会の熱気を言葉と表情で見事に表現し、集会の成功を確定させていただいた。

この集会に至る舞台裏は、波乱万丈・一喜一憂の連続だった。今もまだ表現できない動きもある。それだけに、集会を終えた充実感、表現しがたいものである。幕があがり舞台が始まったのだから、舞台裏はさらに慌しさを増すだろう。華やかでめまぐるしい運動

古村伸宏（日本労協連・事務局長）の展開と前進の影で、陽が当たらない暗がりでごめくものもまた、労協運動と法制化への不可欠の要素である。

思えば、労協を社会的な制度・存在にするための努力は、日陰の身から思い切って陽のあたる場所へと、自ら歩み出ることだった。みんながそう望んでいた。しかし、正直言って「法律が出来るのはまだ早い」という声があることも事実だ。その声を聞いた時に、「いつまで日陰に安住する？陽を浴びて、そこで生きる術を培わなければ、こちらの都合で陽は出てくれない」と思う。我々の事業だって、準備万端で展開してきたのか。確かに求められる水準と現実のギャップは大きいだろう。しかし私は、この2年間経験し目の当たりにした、地域福祉事業所が生まれるプロセス、そこに集った人々の生き様と関係の交差、そしてこの事業所が切り拓いてきた可能性の現実化・・・、これらは間違いなく、陽のあたる場所へと歩むエネルギーを放っていると確信できる。協同労働と地域福祉事業所が20年余の労協運動を誘ってくれた。協同労働法制定を基軸に、色んな動きが形作られようとしている。それは、滞っていた血が巡るごとくに、組織内の人と人が結び直す時期でもある。その結びは、新たな外界の人たちとの結びが、より強度を高める要素となる。

苦手な初対面の人々との結びに踏ん張りたい。どちらかという日陰の役回りになるであろうが、それもこれも舞台のエンディングに向けた物語である。カーテンコールで舞台にあがってみたいものだ。